２０２３年7月2日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「平和の井戸」
聖書：創世記２６：１５～２５

イサクの井戸をめぐる物語は、平和をもたらす大事な論争と言える。イサクが住んでいた地方にひどい飢饉が襲った。水不足の難である。そこでエジプトへ逃れようかと考える。そこには水が豊富にあり、何とか生き延びるであろうと考えたからであるが、しかし主の「ここに留まりなさい」という御声を聞きそれに従う。ところが、主の御声に従ったにもかかわらず、苦難は続く。その地域に住むペリシテ人の嫌がらせを受け、父アブラハムの時代に掘り当てた井戸をことごとく土で埋められてしまった。

この物語では、三度自分たちの井戸を奪われ、追放され、場所を変え、井戸を新たに掘ると言うことを繰り返す。何故そこまでして争いを避けるのか？イサクの群れは弱かったからか？ 16 節≪アビメレクはイサクに言った。「あなたは我々と比べてあまりに強くなった。どうか、ここから出て行っていただきたい。」≫とあるように、決して弱い群れではない。では何故、争いを避けるのか？

聖書は、主の御声を信じることにおける平和への導きが示されている。3 節のところの「わたしはあなたと共にいてあなたを祝福する」と言う主の言葉は、平和への導きそのものである。争う事は主の御心ではない。たとえ井戸を譲ることがあっても、主は必ず養ってくださる。命の水をくださる。神が「共に」いてくださるのだからと、信じ切るイサクの姿を聖書は記るす。

この一連の出来事の中で、イサクは井戸に名前を付けた。「争い」「敵意」、その出来事を象徴する意味の言葉だが、その背景にはイサクに対する「ねたみ」から来る「争い」であり、「憎しみ」から来る「敵意」と言うことになるが、争い、戦争の背景には必ずそのような事から起こるもの。しかし、「神が共にいてくださる」と言う信仰に立つ時、そのようなものと敵対することなく、もう一つの井戸を掘ることに「希望」を抱く事が出来ることを聖書は教えている。

22 節、「更にもう一つの井戸を掘り当てた。それについては、もはや争いは起こらなかった。イサクは、その井戸をレホボト（広い場所）と名付けた」とある。「広い」とは、旧約聖書では「救い」を指す。「彼らが攻め寄せる災いの日／主はわたしの支えとなり／わたしを広い所に導き出し、助けとなり／喜び迎えてくださる」（詩 18:19-20）。争い、戦争には、ねたみ、敵意、憎しみの連鎖しか生まないことを、私たちは歴史から教えられているが、聖書は、争いを避けること、戦争を避けることの試練は、希望を生み出し、広い場所へ、救いへと導くことを教えている。（神谷）